

英語アレルギー除去を目的とした英語講義の展開 文法に捉われない自己欲求を満たすための英会話

The Development of English Lectures for the Purpose of Eliminating the English Allergy:

English Conversation that Satisfies One's Desire while Unconstrained by Grammar

植松 大介
Daisuke Uematsu

Abstract

Most of the students at Musashigaoka College had an English Allergy. They understood the importance and necessity of English, but they had a complex with speaking and basic conversation that they did not know how to resolve. This arose from perceived restrictions by a specific grammatical format, reading using a syntactic structure and from a limited meaning of words learned at the commencement of their English study. This study will introduce the process for reforming the mindset towards spoken English and emphasizing that this is more vital than literary analysis or grammar. As well, students will study conversation with live and useful phrases to satisfy their own desire with emotion and reaction.

キーワード：英語アレルギー、文語と口語英語、会話と文法

Key words：English Allergy, Literary Analysis, Spoken English, Conversation and Grammar

I . はじめに

本学の学生における「英語に対する意識・関心」は残念なことに高いとは言えない。また「英語」や「横文字」を目にただけで拒絶反応（アレルギー反応）を起こしてしまう学生も多い。しかし、日本政府の“Visit Japan”キャンペーンによる観光立国としての定着化 2020 年の東京五輪開催の決定が起因し、訪日外国人が 1,000 万人を超えている現状において、今後は職場ではなくても日常生活のどこかで英語が必要となると考えられる。したがって、本学の学生達に少しでも英語とコミュニケーションの面白さを体験してもらい、担当講義である「英語コミュニケーション」を通して、英語アレルギー除去と「活きた英語＝使える英語」を学ぶ動機付けを試みた。

II . 実施内容および結果と考察

《英語コミュニケーションⅠ》

受講者数：102 名

単位認定者：102 名

出席率：97.8%

《英語コミュニケーションⅡ》

受講者数：18 名

単位認定者：16 名

出席率：95.7%

1. 英語への現状意識把握

授業を開講するにあたり、冒頭で受講生へ以下の質問を口頭で聞いた。（全て YES / NO 挙手制）

- (1) 英語は好きですか？
- (2) 英語は話せますか？
- (3) 英語が大事なのはわかっている。
- (4) でもやり方がわからない…
- (5) 外国人が困っている…助きたいでも、
できるなら避けたい…

回答結果は、(1) と (2) の質問において、ほとんどの学生が「NO」、その他の質問においては「YES」と挙手した。

(1) の質問において「NO」と回答した学生には、「いつ頃から、なぜ嫌いになったのか？」という質問を追加した。結果は以下のような返答であった。

「いつ頃から？」

- ・ 中学1年生の終わり、もしくは中学2年生のはじめ。
- ・ 中学3年生の時には「もう無理だと思った。」
- ・ 高校時の英語授業は、ほとんど寝てた。
「なぜ嫌いになったのか？」
- ・ 最初は良かったが、「～詞」「～的用法」という言葉が出てきた時点で。
- ・ 単語を覚えさせられたが使い方がわからず、実用性があるのが分らない。
- ・ 教科担当者が嫌いだった。
- ・ 教科担当自身英語が話せないのに「社会で必要」と強制してきて不信感があった。
- ・ 日本人に英語は必要ない。海外に行くつもりもないから。

以上の回答を考察した結果、受講生のほとんどが一種の「英語アレルギー」を有し、その原因は「文法」「文語英語」に対しての拒絶反応ではないかと考えられる。

2. 本当に英語を話せないのか

(2) の質問において「話せない」と答えた受講生に対し「話せるとはどのレベルまでをいうのか」という質問を追加した結果、ほとんどの受講生が「日常会話程度」と回答した。

この返答を受け、さらに趣向を変えた別の質問をアトランダムに実施した。

「あなたは泳げますか？ 蹴伸び、犬かき、バタ足何でも結構、どのくらい泳げますか？」

(この際何メートルという「距離」を示す言葉はあえて使用しない。)

最短は10m、最長で遠泳も可能とのことで、返答は「10mなら泳げます」というものであった。この「～ならできる」返答を得た時点で英語の質問に切り替えリズムカルにテンポよく聞いた。

Q:「おはようございます」を英語で何という？

A: “Good Morning”

Q:「こんにちは。(午後)」は？

A: “Good Afternoon”

Q: では「こんばんは」は？

A: “Good Evening”

Q:「おやすみなさい」は？

A: “Good Night”

Q:「自己紹介を英語で」

A: “My Name is ○○△△”

Q: “Where do you come from?” (意図的に英語で質問)

A: “I came from Saitama”

以上の返答を得てから、改めて受講生に「皆さん、本当に英語が話せないのですか？ 今英語を話していますよ？」と問いかけた。また受講生に解説をするにあたり、なぜ「○○mなら泳げます」と答えられるのに、「英語は話せません」と答えるのか。「○○mなら泳げます」と同様に「挨拶なら話せます。自己紹介なら話せます。」と答えないのかと投げかけたところ、「その程度は中学生の時に学んだ常套句であり、基本中の基本だから」「これは英語とは言えない」とのことであった。つまり「英語を話す」という概念が「流暢に話す」という概念にすり替わってしまっていることが考えられる。

3. 英語に対する意識改革と目的提示

受講生へ「英語に対する意識改革とその目的」として以下の8項目を提示した。

(1) 全員英語は話せる。間違っても構わないから、きちんと声に出す。

(2) 今までの英語学習方法はとりあえず忘れる。

英語において今まで「読み」「書き」を中心に授業が行われてきた。無論重要なことだが、これからのは会話の時代。「英語」という音を拾い、それを繋げる作業が中心となる。「読めない、書けない、でも話せる」で構わない。

(3) 会話に文法は不要。

会話というものは文字ではなく言葉で行われるものであり、また記録に残らず記憶に残るものである。したがって文章や文法構成を含めた「構造」を考える余裕はなく、むしろ勢いが大事であり、あえて文法を気にせずに言葉のキャッチボールをする訓練を行う。

(4) 自己欲求を満たす英語の習得。

物品購入や飲食など、諸外国で簡単な単語を使って自分の欲求を満たすために必要最低限な単語・フレーズを学んでいく。

(5) 「自分の気持ち」を「知っている単語」を並べて伝える。

自分も人であり、相手も人である。何を伝えたい

のかと考えてくれるはず。自分の気持ちをしっかりと乗せて、知っている単語を一生懸命伝える訓練を行う。

(6) 言葉で伝わりにくいのであれば、全身を使う。

言葉がうまく出てこないのであれば、ジェスチャーを使って表現をする訓練を行う。

(7) 国際社会など堅苦しい概念に捉われない。

グローバルコミュニケーション等の難しい横文字に捉われず、近い将来自分に起こるうる外国人への対応を優先する。まずは自分の周りから。そして外へ。

(8) 2019、2020 年に向けての対応。

2019 年ラグビーワールドカップ日本開催、2020 年東京五輪の開催が決定している。多くの外国人が来日することが予想されるため、仕事で英語を用いなくても通勤途中等の日常生活において英語が必要になるケースを想定し、その準備を今から行う。

4. 授業内容の工夫

主だったテキストは使用せず、レジュメ、音楽、動画、パワーポイントを利用し、さらにゲーム的要素を取り込んで用いての講義を行った。また、授業内容はコミュニケーションの重要性の理解してもらうことと、前項の (2),(3),(5) の意識改革を中心に運営を行った。

(1) 21 (Twenty-one) ゲーム (同一方向)

1 グループ 8 人～10 人で構成し、1 から順に 21 まで英語でカウントアップしていく。受講生は同一方向を向いており、規則性が生まれないように配置し、同時に同じ数字を言ってしまった場合、Fail として再度 1 から数え直す。前の人が言った数字と次の数字を言う間を 5 秒以内に設定した。

(2) 21 (Twenty-one) ゲーム (双方向)

(1) と同じ方法だが、受講生がお互いの顔を見ながら数字をカウントアップしていく。また双方向の場合は、30 秒以内の終了を目標とし、タイムアタック形式で行う。

(3) コミュニケーションキャッチボール

ボールを使用し、間合いの感覚を養うことを目的としている。テーマは「自己紹介」を中心に行った。自分の発言に対し、相手へ同じ問いかけ、もしくは質問を変えてボールを投げ返す。さらに「単語 1 語での返答」を禁止とし、最低でも 1 トピックス 10 回のキャッチボール、10 回に満たない場合は会話

のトピックスを 2 種類以上盛り込むことを条件に設定した。

(良い例)

A: 「I love playing football. How about you?」

サッカーが大好き。あなたは?

B: 「I love cooking. Do you cook?」

私は料理が好き。あなた料理する?

A: 「Sorry, not so much. What kind of food do you cook?」

ごめん、あまりしないんだ。どんな料理を作るの?

(悪い例)

A: 「What is your hobby?」

趣味は何?

B: 「Basketball, You?」

バスケだよ。あなたは?

A: 「Baseball」

野球だよ。

(4) 音楽聞き取りワークシート

穴埋め式英語歌詞と和訳歌詞のプリントを各 1 枚用意し、まず和訳歌詞を読む。読んだ後に音楽を数回流し、どのフレーズがどの和訳に該当するかを合わせる。最後に英語歌詞の穴埋め部分を記入させる。(この際「空欄を埋めてください」とだけ指示を出す。) この作業の目的は歌のサビの部分にどのようなフレーズが使われているかを聞き取ることで耳を英語に慣れさせ、同時に英単語を拾い、英語アレルギーを除去することである。この穴埋め作業を進めていく際に「英単語が書けない」という声が非常に多かった。しかしこの作業の目的は「慣れる」ことであり、単語が「書ける」ことよりも、「聞き取れる」ことが重要である。したがってカタカナでの記入でも良いと説明を加えた。会話とはライブで行われるものであり、キーワードとなる言葉を拾うことが大切である。拾えたキーワードから会話が発展し、相互理解が得られるのである。

(5) ケース別日常会話練習

通常のテキストに記載されている会話文は、非日常的なトピックスが多く取り込まれていることが多く見受けられる。非日常的な会話を練習するよりも、日頃起こりうる状況の中でどのように対応するかということが重要であり、日常会話に重点を置き、2 つの事例を挙げて練習を行った。

- ①空港での入国審査
- ②駅での乗り換え案内

日常会話の練習において、受講生は全て「言葉」だけで伝えようとしている様子がうかがえた。そこで「小道具を使わないのか?」と確認をしたところ、質問の意図を理解できなかったのか、ほとんどの受講生が「持たない」と答えた。ここでいう小道具とは、空港であれば「ポケットハンドブック」や「パスポート」「旅行確認証に記載されている宿泊先」などのことである。これらを用いて、「なぜ自分がこの国に入国するのか」という理由を提示することができる。また駅には必ず「路線図」があり、線ごとに「色分け」されている。「駅名」や「色」を用いて知っている単語を並べ、自分の気持ちを乗せて一生懸命に話せば、相手には必ず伝わる。以上の説明を加え、再度同じ練習を行ったところ、片言ではあるものの、入国審査や路線案内が相手に伝わる程度の会話ができるようになった。

(6) ネイティブによる特別授業の実施

毎回同じ場所で同じ時間、同じ講師が授業を行うと、必ずと言って良い程「飽き」「間延び」が生じる。この間延びを解消するために6週間に一度外国人講師を招聘し、授業の冒頭から終わりまで、日本語を一切使わずに英語のみの講義を行った。また冒頭で外国人との会話において必ず意思表示をすることを義務付けた。最初は遠慮がちで自信がなかった受講生達だが、感情とリズムを意識的に強調した講義を通じて、相手の質問の意味を理解し、またそれに一生懸命答えようとしている姿勢が多く見受けられた。

Ⅲ. まとめ

今回の試みにおいては、受講者へのアンケート調査等を行っていない。しかし普段の学校生活において著者へのあいさつや簡単な質問等を英語で聞いてくる受講生が多く見受けられた。英語で質問をし、英語で返答される。その返答に困惑し、それを取り越えるためにどのような言葉とアプローチ、技法が必要かを主体的に考える意識が少しずつ芽生えてきたと考えたい。また「読み」「書き」「文法」に捉われない「聴く」「話す」作業を中心とした授業運営によって、英語に対する拒絶反応（英語アレルギー）が少しずつ薄れ、今までとは異なる英語への

興味・関心が芽生えてきたようにも考えられる。

Ⅳ. 謝辞

今年度より、今までとは異なる講義運営方法を実践することができた。多くの先生方に助言やアイデアを頂き、最も有効な講義運営方法を日々研鑽する機会も頂いたことに、厚く御礼申し上げる。



Communication Catchball



Native 講師による特別授業風景



Native 講師との記念撮影